

第九章 洋書の輸入

一 慶応義塾の日課表

丸屋商社の創業の、第一の、また最大の目的は、西洋の書籍の輸入であった。ただ現在丸善に保存されている輸入書籍目録は、明治十六年のものが最古であって、それ以前のものは存在しない。そのために開店当初に、どのような書籍を輸入したかということについて、正確な資料が殆どないのは極めて遺憾である。しかし当時の情勢から考えて、まず語学書、特に英語学の書物、それからあらゆる学問の分野で、極めて初歩の入門的なもの、また一般的・通俗的なもの、そして学制がやや整頓してからは、その教科書として使用するのに適当なものが多かったことは、いうまでもあるまい。しかしその中に、当時の学界の標準的なものが存在していたことも、また見逃がすことができない事実である。

側面からこれを知る資料として、明治元年版の「慶応義塾之記」の付録に、日課表がある。義塾が芝新銭座に移転した当時の、学科・教科書・教師・時間割等を知ることができる。それは左の通りである。

日課

一、エーランド氏経済書講義

福沢諭吉

火曜日 木曜日 土曜日 朝第十時より

一、クアッケンボス氏合衆国歴史講義

小幡篤次郎

月曜日 水曜日 金曜日 朝第十時より

一、同窮理書講義

村上辰次郎

月曜日 木曜日 午後第一時より

一、パルレイ氏コンモンスクール万国歴史会読

小幡甚三郎

火曜日 金曜日 午後第一時より第四時迄

一、クアッケンボス氏窮理書会読

永島貞次郎

水曜日 土曜日 午後第一時より第四時迄

一、コヲミング氏人身窮理書会読

松山棟庵

月曜日 木曜日 午後第一時より第四時迄

一、コルネル氏ハイスクール地理書素読

小幡篤次郎

日曜日の外毎日 朝第九時より第十時迄

一、ペイトルパルレイ氏万国歴史素読

永島貞次郎

日曜日の外毎日 朝第九時より第十時迄

一、スミス氏窮理初歩

村上辰次郎

日曜日の外毎日 朝第九時より第十時迄

一、文典素読

小幡甚三郎

松山棟庵

小泉信吉

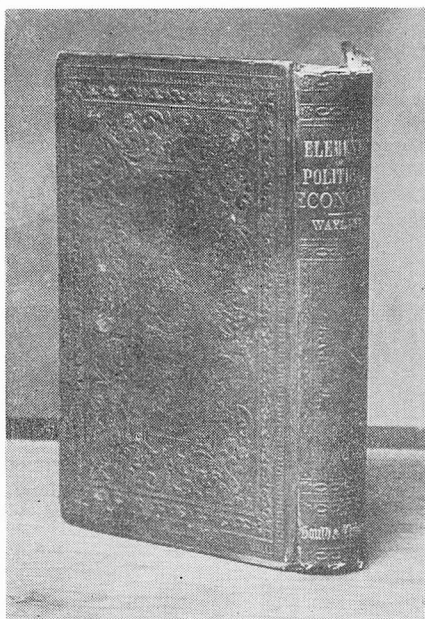
日曜日の外毎日 朝第九時より第十時迄

これによってウエーランドの経済書、クアッケンボスの合衆国史、また窮理書、パーレーの万国史、コーミングの人身窮理書、コーネルの地理書などが、義塾の教科書として使用されたことが知られる。

全体福祉が帰朝に際して齎した書籍の中で、特に教科書として適当であると判断したものは、一種類について数十部の多きに上るものもあったので、これを塾の図書として塾生に貸し与えたから、その限りに於いては当時一般に行われていたような筆写による手数もなかったが、塾生の数が殖え、さらに塾以外でも同一の書物の需要が多くなると、これらは勿論輸入に俟つよりほかはなかった。そして洋書の価格が次第に低落してくると、この傾向はますます強くなったと思われる。そうだとすれば、前に挙げたような種類の書籍は、少なくとも初期の丸善が輸入した代表的なものであったといつてよいであろう。そしてまたこれを支持する若干の直接の資料も、ないわけではない。

二 ウエーランドの経済学と倫理学

ウエーランド (Francis Wayland, 1796—1865) は、アメリカの教育家で、牧師であったが、また経済学者であ



Wayland-The Elements of Political Economy (慶応義塾大学図書館蔵)

って、一八二七年から一八五五年にわたってブラウン大学の学長となっている。その著「経済学原論」(The Elements of Political Economy, 1837)は、彼が大学で学生に講義した経済学の概要を纏めたものであって、第一部生産論、第二部交換論、第三部分配論、第四部消費論と、部門を分けて、経済の現象と理論とを説明している。従がって特に独創的というべき点は乏しく、高橋誠一郎博士は

「英国正統学派の経済理論を基礎とし、幾分米国学派の所論を参酌して、これを平易通俗に表明したに過ぎないもの」

と評されている。しかしこの書物は、アメリカで教科書の形で著わされた最初の経済学であったために、初版の発

行以来数十年にわたって、多大の売れ行きを示し、アメリカ国内で版を重ねたばかりでなく、ヨーロッパでも広く読まれた。

福沢は、その以前からヨーロッパの経済学について、若干の知識を持っていたのであるが、この書に接して、啓発されたところは極めて大きかった。

「就中其経済論の如き、初は之を読むこと頗る困難なりしかども、再三再四復読して漸く

其義を解すに及び、毎章毎句、耳目に新ならざるものなく、絶妙の文法、新奇の議論、心魂を驚破して食を忘るに至れり。」(三田演説第百回の記)

と彼は自ら告白している。

明治元年五月に、上野の戦争のあった時、北方に起る砲声を耳にしながら、福沢が新銀座の塾で講義を続け、新文明の建設のために気を吐いたのは、今に語り伝えて慶応義塾の誇りとする逸話であるが、その時の講義は、実にウーランドの経済書であった。(これについては、「明治建設」という木村毅博士の小説がある)そして慶応義塾の理財科が、日本の近代資本主義経済の建設の、一つの大きい礎石となったことを思うと、この一部のウーランドの「経済学原論」の及ぼした影響は、実に絶大なものであったといえることができる。

ウーランドの経済論の部分訳としては、福地桜痴の「官版会社弁」(明治四年)、何礼之の「世渡りの杖」(明治五—七年)等がある。完訳としては、小幡篤次郎の「英氏経済論」(九冊明治四—十年)がある。小幡は福沢に引き続いてウーランドの講義を担当したものである。

ウーランドは牧師であったから、経済の原則は、道德の精神と一致することを本旨とし、「経済論」の姉妹編として、「道德学原論」(The Elements of Moral Science. 1835)を著わし、さらに晩年には「知識哲学原論」(The Elements of Intellectual Philosophy. 1854)を著わした。合せて三部作といふべきものである。この「道德学原論」は、福沢はアメリカからは齋らさなかったが、却って珍らしくも日本で手に入れた。

「明治元年の事と覚ゆ。ある日小幡篤次郎氏が散歩の途中、書物屋の店頭に、一冊の古本を得たりとて、塾に

持ち帰りて、これを見れば、米国出版ウエーランド編纂のモラル・サイヤンスと題したる原書にして、表題は道徳論に相違なし。同志打寄り、まづその目録に従つて、書中のここかしこを二三枚づつ熟読するに、いかにも徳義一偏を論じたるものにして、はなはだおもしろし。かかる出版書が米国にあるといへば、一日も捨て置き難し。さつそく購求せんとて、横浜の洋書店丸屋に託して、同本六十部ばかりを取り寄せ、モラル・サイヤンスの訳字についても、さまざま討議し、つひにこれを修身論と訳して、ただちに塾の教場に用ひたり」(福沢全集第一巻四八頁)

小幡篤次郎が手に入れたものは、おそらくと外人が所持していて、それを売り払ったものでもあらうか。そして丸屋に託して、六十部を取り寄せさせたところのは、恐らく丸屋の開業後幾ばくもない頃であるから、ウエーランドの「道徳学原論」は、丸屋が初期に輸入した書籍の中で、最も確実な証拠のあるものといふことができるであらう。

「道徳学原論」は、第一編 理論篇 (Book I, Theoretical Ethics) と、第二編 実践篇 (Book II, Practical Ethics) とから成り、更に後者は第一部 神への愛即ち敬神 (Part I, Love to God, or Piety) と、第二部 人間に対する義務 (Part II, Duties to Man) に分れている。そして全編を通ずるものは、いうまでもなく、キリスト教の信仰に基づく実践道徳である。福沢はこの書の第一編及び第二編の第一部には、それほど興味を持っていないようであるが、その第二部殊に互恵 (Reciprocity) には、強い関心を払った形跡がある。これは福沢の現実的で常識的な性格によるものであらう。即ち本書に説くすべての人間が、貴賤、貧富、老弱、男女の別なく互^レン^フォーカル

であって、何人もその固有の権利を、侵されぬという思想は、従来の東洋的な封建思想を最も端的に打破するものであって、福沢の民主主義的精神を、最も鼓舞したものであったと思われる。

福沢の初期の文章、特に明治五年から九年にかけて刊行された「学問のすゝめ」は、その代表的なものであり、その影響が特に著しく見られる。板倉卓造博士は、かつて『学問のすゝめ』と Wayland's Moral Science とう論文の中で、両者を対照して指摘されたことがある。それは第二編人は同等なる事 (The Duty of Reciprocity, p. 191 以下) 第六編国法の尊きを論ず (The Duties of Citizens, p. 363 以下) 第七編国民の職分を論ず (同上) 第八編我が心を以て他の身を制す可からず (Of the Nature of Personal Liberty, p. 202 以下) 等である。これによって従来福沢の発想として考えられていた議論がほとんど全くウエーランドから借用したものであることがわかる。

事実福沢自身「我心を以て他人の身を制すべからず」の冒頭に

「亜米利加のエイランドなる人の著したる『モラルサイヤンス』と云ふ書に人の身心の自由を論じたることあり。其論の大意に云く」

とあって、ウエーランドから借用したことを明らかにしている。しかしまたこれによって、福沢が比較的平凡な原文から、自由に換骨奪胎して、平明暢達で卓拔雄偉な文章を鑄成したことも、知ることができるのである。伊藤正雄氏が

『修身論』の精神は、福沢の血となり、肉となって、生涯にわたって、彼の言論の上に、いろいろな形で現

われたと思はれる」

と論じたのは、適切な批評であろう。

なおウエーランドの「道徳学原論」を翻譯したものには、「修身学」和三冊・神鞭知常訳・明治三年、「泰西修身論」和三冊・山本義俊訳・明治六年、「修身論」和三冊・阿部泰蔵訳・明治七年、「威氏修身学」洋二冊・大井鎌吉訳・明治十一—十二年等がある。ただし最後のものを除いて、すべて簡約版 (abridged edition) の翻譯である。最後のものは原版の全訳で上下合せて八〇〇頁に及ぶ大冊であるが、生硬な文章の悪訳である。(以上ウエーランドの経済書及び倫理書については、伊藤正雄氏の「福沢諭吉の研究」(甲南大学紀要文学編—所収「福沢の筆に投影したウエーランドの『経済論』」「福沢のモラルとウエーランドの『修身論』」に、よるところが極めて多い。)

三 カッケンボスの諸著書

ウエーランドと共に、明治初年の日本の英学者たちに、大きい影響を与えたのは、カッケンボスの諸著書である。カッケンボス (George Payn Quackenbos, 1826—1881) は、その名から推測すると、オランダ系のアメリカ人らしい。ニューヨークに生れ、コロンビア大学で法学を専攻し、一八四三年に業を卒えると、ニューヨークの諸学校で教鞭を執った。一八四八年から一八五〇年にかけては、The Literary American を編輯し、またドイツのハウフ (W. Hauff) 作の童話を翻譯している。一八五二年には Spiers and Surene's French Dictionary の編集にも参加した。後にはニューヨークの The Collegiate School の校長となり、法学博士の学位を受けた。

カッケンボスの著書は、主として学校教科書である。しかしその学科の範囲は極めて広く、英文法、作文、修辞学、歴史、物理学、数学などの各分野にわたっている。その主要なものとしては、次に挙げるようなものがある。

First Lessons in Composition 作文初歩

Advanced Course of Composition and Rhetoric 高等作文及修辞法

First Book in English Grammar 英文法初歩

English Grammar 英文法

Primary History of the United States 初等合衆国史

Elementary History of the United States 合衆国史要

Illustrated School History of the United States 絵入合衆国史教科書

A Natural Philosophy 自然哲学(物理学)

Primary Arithmetic 初等算術

Elementary Arithmetic 算術綱要

Practical Arithmetic 実用算術

Higher Arithmetic 高等算術

Mental Arithmetic 暗算法

これらはカッケンボス標準教科書(Quackenbos' Standard Text-Books)と呼ばれ、ニューヨークのアップル

トン書店から発行された。

カッケンボスの時代から、百年を隔てた現在の学問の水準によって、その教科書の価値を批評することは、勿論公正ではない。それよりも、この著者の知識が、人文科学、自然科学の両面に広く互り、これを平易に明晰に、初歩の学生に理解しやすく記述したことを多とすべきであらう。これらの教科書が、合衆国の各地で広く採択されて、好評を博したことが、何よりのその証拠である。これを使用した人々の或者が、「いままで使用した多くの種類の中で、最も完璧に近い」といい、「カッケンボスは、教科書の著者として、稀な資質を有している」といい、また「この優れた著者の、すべての著作は、明晰、正確、完璧、という特色を持っている」と賞讃しているのは、必ずしも過褒とは思われない。

こうした長所を持って、アメリカに広く行われた、カッケンボスの各種の教科書が、西洋の一般的な知識を急速に取り入れようとした、明治初年の日本人に取って、最も歓迎されたことはいうまでもない。明治元年の慶応義塾の日課表に、カッケンボスの教科書が、「窮理書」(Natural Philosophy)と、「合衆国歴史」と、二部まで使用されていることは、はじめに挙げた通りである。

明治元年(一八六八年)秋、福沢諭吉は、「訓蒙窮理図解」を編纂して、物理学の初歩を、極めて通俗に紹介した。その平易な文章と、おもしろい挿絵は、一般に歓迎され、当時の初等学校の教科書などにも広く採用された。そのために仮名垣魯文の「胡瓜遣」^{きうりづかい}などという戯作まで、出版されたくらいである。福沢はこの書物の凡例の中で、これを編纂するに当って利用した七種の名を挙げているが、その中にも米版「クワッケンボス」窮理書千八

百六十六年とあって、この書物が利用されたことがわかる。

なお慶応義塾で明治六年頃からアメリカの学制に倣って、学科課程が編成されるようになると、修辞学や、合衆国史や、自然哲学が、それぞれ教科書として使用された。また大学南校はじめ官立の諸学校では、英文典としては、カッケンボスのものを専ら使用した。明治三年大学南校の開版で「格賢勃斯英文典直訳」が公けにされているのが、その証拠である。

札幌農学校に在学した新渡戸稲造（当時太田姓）が、明治十年九月に、東京の養父に宛てた書簡の中に

「井原君に相願候間コウツ著演説書（金一円五十錢位）、クワッケンボス著大文法書（一円五十錢位）、ミル著論理学并に襟紙一箱を御求め被下度願上存じ候也 多分井原君御宅へ参る可く候間其節丸屋なり山和屋なり西洋書屋にて右の書物御求め被下度候也」

という一節がある。丸屋でこの書物を販売していたことや、札幌農学校でこれを使用していたことと共に、その代価も知られて興味が深い。

こうした事情からその翻譯も早く企てられた。その「合衆国歴史」については、早く河野通之が漢訳を試みた。しかし河野は英学に通じていても、漢学の素養は、それほどではなかったので、その補正を岡千仞に依頼した。岡千仞は佐藤一斎の門下で、漢学の大家として声名が高かったが、欧文には通じなかったので、しばしば原意を訳者にただし、明治四年に修訂を完了して、明治六年の末に刊行された。これが「格堅勃斯原本米利堅志」である。発行所は光啓社・博聞社であった。岡はこの訳書の文章に、よほど自信があったと見えて、明治七年に大久保利通が

特命公使として渡清した際に、これに託して清国の名流の批評を乞うた。特に岡が希望したのは丁韪良（ウイリアム・マーチン William Martin）であったが、丁韪良は、これをその友李善蘭に托し、李善蘭は序文を「米利堅志」に寄せた。その序文は、明治八年版以後の「米利堅志」の巻頭に載っている。

なおかなり後になるが、明治二十六年（一八九三年）に、藤井政景はこれを翻譯して、「クワッケンボス氏合衆国史直訳」の名で、戸田直秀によって刊行された。また同年戸田直秀は、Elementary History of the United States の原書を、翻譯して刊行した。カッケンボスの著書の利用は、実に明治の中期にまで及んでいるのである。（以上のカッケンボス及びその著書に関する記述は、大部分町田俊照「クワッケンボスについて」日本英学史研究会研究報告第七二号に基づいている）。

カッケンボスの文典（First Book in English Grammar）と並んで、当時広く行われたのは、ピネオ（T. S. Pinneo）の文典（Primary Grammar of the English Language for Beginners. 1854）である。著者ピネオについては、編者は不敏にして、全く知るところがない。ただその名から推して、イタリア系のアメリカの教育家ではなかったかと想像されるのみである。この書は明治二年（一八六九年）に、慶応義塾読本として、「ピネオ氏原板英文典」の名で、覆刻されている。また翌明治三年に、永島貞次郎がこれを訳して、「英文典直訳」の名で、慶応義塾の教科書として用いられている。漢文の返点に倣ったものか、各語の訳に番号をつけて、訳はこれを追ういわゆる返り読み式で書かれているのは、甚だ興味がある。明治四年に出版された「英文典便覧」は、忍おしの青木輔清が編述し、忍県洋学校で出版したもので、日本人が著わした最初の英文典であるが、例語・例文は、ピネオのそれ

を取ったものが多い。

四 パーレーの万国史

ウエーランド、カッケンボスの著書と共に、明治初年の教育學術に、大きい影響を与えたものは実にパーレーの万国史 (Peter Parley-Universal History) である。

ピーター・パーレーとは、サミュエル・グッドリッチ (Samuel Griswold Goodrich, 1793—1860) の別名である。彼に関しては最近ダニエル・ロセルの著した「グッドリッチ伝」(D. Roselle-Samuel Griswold Goodrich, Creator of Peter Parley, 1968) が公けにされている。彼は著作者でもあったが、同時にまた出版者でもあった。大統領フィルモアの時代には、しばらく (1851—1853) パリの領事に任命されたことがある。著書としては、Sketches from a Student's Window・Recollections of a Life-time などがよく知られており、出版したものとしては、「ピーター・パーレー叢書」(Peter Parley Series) が有名である。これは地理・歴史・科学・美術等の各種の内容にわたって、少年向きに豊富な挿絵を入れて刊行したもので、大いに人気を博して、一一六巻にまで及んだものである。

さて彼の万国史は、A Political History of the World, ancient and modern for the use of schools と名づけられたものである。そしてこれは、パーレー自身の著作ではなくて、実は有名な作家ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804—1864) の作であるところ。

ホーソーンのアメリカ文学における大名は、ここに改めて言うまでもない。それは *Scarlet Letter* (緋文字) 1850 や *House of the Seven Gables* 1851 の名を挙げるだけで充分である。グッドリッチは、一八二八年以来、"Token" (しるし) と称する贈答用の詩文集を、一年一回発行していたが、当時なお無名のホーソーンは、その寄稿家の一人であった。そうした関係から、ホーソーンは、バーレーの依頼によって、その二歳上の姉と共に、万国史を著わしたものである。その初版は一八三七年で、二冊本であった。ホーソーンには、*Biographical Stories* (伝記物語) という著書があるが、その中の記述と同じ記述が、「万国史」の中に見えるところからしても、この推測は誤りないであろう。

勿論バーレーの「万国史」は、現代的な意味での歴史ではない。本書は最初に序論があり、次にアジアの部がある。その大部分は旧約聖書の物語の抜萃である。しかしペルシア、シナ、日本、アラビア等も略叙してある。次はアフリカの部であって、エジプト史から奴隷貿易のことまで略述してある。次のヨーロッパの部は本書の大部分を占め、特にギリシア・ローマに関する記事は詳細である。以下トルコ、スペイン、フランス、ドイツ、ロシア、イギリスと各国別に重要な事件が述べてある。次はアメリカであるが、合衆国に関する記述の比重がそれほど重くないのは、やはり万国史という体例に縛られたものであろうか。最後はオセアニア(大洋洲)であるが、ここでパウレンティ号の叛乱とその後日譚について、詳しく述べているのは、恐らくオタハイト島でその子孫が発見されたことが、当時の人々を驚かせた事件であったからであろう。

以上のように、この書物はわかり易く通俗的で、初歩の読物である。しかしその中には、なかなか味のある言葉

もないではない。トルコ王バジャゼットが、タタール王チムールと戦って、敗れて捕虜となり、チムールはこれを鉄檻の中に囚えたというのは、有名な伝説であるが、著者は、このことについて述べた後に

「多くの征服者は、野獣に類似したところがある。彼等がつねに鉄の檻の中に監禁されていればよいであろうに」

と批評しているのなどは、すこぶる辛辣である。

三宅雪嶺は、この書物を名古屋の英語学校で学んだようであるが、

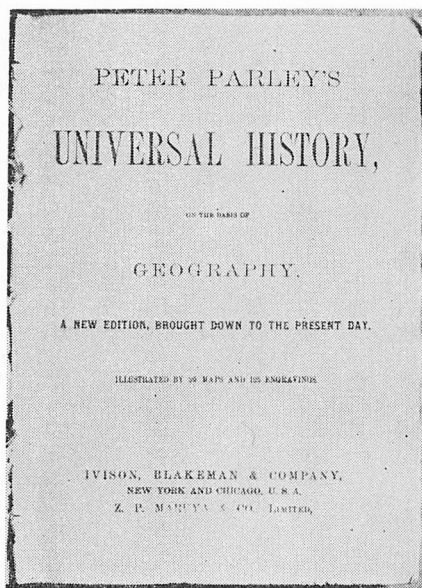
「歴史として、もっぱら児童用に属し、たわいもないものながら、たわいもない者の中、案外着眼点および評語の面白いのがあること、いささか十八史略に似ている」

と評している。

アメリカ文学の大家と、元代の無名の進士とを同一列に並べることは、あるいは適當でないかも知れない。しかし十八史略が、漢から宋に至る正史の中から、興味がありまた鑑戒となるべき逸話を摘録して「十八史略」を編纂したように、ホーソーンもまた西洋の史書から、興趣に富む物語を集めて「万国史」を述作した。そして両者ともに、平易で人々に理解し易かったことは、最もよく似ているといつてよいであらう。

福沢諭吉が、その「西洋事情」(第二編卷之二)の中で、ロシアの歴史を述べて

「国のために善を施したる実功を論ずれば、ペイトル以前ペイトルなし、ペイトル以後ペイトルなし。実に空前絶後の英主と称す可し」



パーレーの万国史に Maruya の名が印刷してあるもの

と言っているのは、最も精彩ある一節である。その雄勁な文章は、もとより福沢独特のものであるが、その歴史的記述は全くパーレーに依ったものである。なおこの類のものは、他にも多い。

こうした事情でパーレーの「万国史」は、広く英学生の間に行われ、その需要はすこぶる多かった。面白いことには、この書物自身の中に、その記事が見えていることである。すなわち「万国史」の一八七四年（明治七年）版の第三十一章「日本の歴史」の中には

「日本人もまた久しく隔離して生活して来た諸国民の歴史について、知らんことを欲しているようである。それはいま諸君が学びつつあるこの小さい書物（万国史）の発行者は、遠い日本から、しばしば二百・四百・六

百という冊数のパーレー『万国史』の注文を受け取るからである。」

とある。

これはそれ以前の版にはなく、この新版に付け加えられたものであって、現在から見ればその部数はさほどのものではないにしても、その当時として半開国の日本への輸出の多いことが、いかに出版者を驚かしたかがわかる。その中でも特に丸善からの注文は、首位を占めていたようであって、そのため

に出版者は、わざわざタイトル・ページの下部に MARUYA と印刷して送ってくるようになった。出版者が、扉に MARUYA と特別に印刷したものとしては、パーレーの「万国史」などは、恐らくその最も早いものに属するであろう。

パーレーの「万国史」の翻訳は、勿論多く現われた。いわゆる直訳体の学習書のようなものを別にして、左のようなものがある。

西洋夜話 五冊 寧静学人 明治元年 (これは抄訳本である)

パアリー万国歴史 四冊 吉田屋藏梓 明治二年

巴礼氏万国史略 十冊 橋爪貫一

巴来万国史 二冊 牧山耕平訳 文部省 明治九年

(以上の訳書については、酒井三郎「日本西洋史学発達史」による)

それらが初歩的なものであり、通俗的なものであっただけに、その及ぼした影響は、却って案外に広くまた深く滲透したものがあったのである。

五 スウィントン及びフィッシャーの万国史

パーレーの万国史について述べた序に、慶応義塾の日課には見えないが、やや後れて、広く学生に読まれたスウィントンの万国史 (Outlines of the World History. 1874) にひびく一言を費した。スウィントン (William

Swinton, 1833—1892) は、スコットランドのソルトン (Saltoun) に生れたが、一八四三年にカナダに移住して、トロントで学び、ついで合衆国に移つてアマースト・カレッジに学んだ。業を終えて、グリーンズボロやニューヨークで教鞭を執り、南北戦争中は、ニューヨーク・タイムスの戦時通信員になったこともある。一八六九年から一八七四年に至るまで、カリフォルニア大学の英文学教授となつた。歴史殊に軍事史に興味を有して、「十二の決戦」(Twelve Decisive Battles of the War. 1867) などの著書があるが、「万国史」もその一つである。

「万国史」には、History of Civilization and the Progress of Mankind (文明と人類の進歩) という副題がある。それだけに、バーレーのそれよりは、よほど体裁が整っている。第一部は古代東方諸国であつて、オリエント史の概要を説く。第二部はギリシア史で、以下第三部にローマ史、第四部に中世史、第五部に近世史を述べている。古代に精しくて、近世に粗であるという欠点はあるが、ギリシア文明の項などでは、宗教・哲学・文学・美術・風俗にまで説き及ぼして、標題の趣旨を明らかにしている。若干の地図も挿絵も挿入されている。バーレーの万国史を、初等学校の読本とすれば、スウィントンの万国史は、ハイスクールの教科書というべきものであろう。徳富蘇峯の回想録によると、蘇峯は明治九年に同志社に入學して、バーレーの「万国史」を教科書として使用したが、内容が彼に取つては幼稚に過ぎたので、教師に要求してこれに代るものを探し、大阪の丸善支店でウィルソンの「万国史」を数部発見して、これを京都に携え帰つたという。それから間もなくスウィントンの「万国史」が一冊到着して、珍らしく思われたが、上級生の手に渡つて、蘇峯等には高嶺の花であつた。それは明治十二年から十三年の頃であつたという。

スウィントンには、この外になお多くの語学・文学に関する教科書の著作がある。それらは日本にも多く輸入されたらしい。中でもハーバー語学叢書 (Harper's Language Series) 中の「初等英文法及び英作文」(An Elementary Grammar and Composition. 1887) 『英文学精華』(Studies in English Literature) などは、広く行われたようである。後者はシェークスピアから、ハックスリイに至る四十人の文人について、その略伝、評論、代表的作品の抜萃を集録したもので、英文学の入門に便利である。日本で三省堂の翻刻がある。

バーレーやスウィントンよりも、さらに後れてまたやや高級であるが、フィッシャーの「世界史概説」(Outlines of Universal History) に、ついで、書き添えて置きた。この書は designed as a Text-Book and for private reading という副題があつて、一八八五年に American Book Company から刊行されている。著者フィッシャー (George Park Fisher, 1827—1909) は組合教会の牧師であつて、ヘル大学の神学の教授として、教会史を担当した。著書には Christian Religion. 1882; The Colonial Era. 1892; Brief History of the Nations. 1896 等がある。「世界史概説」は、その中でも最もポピュラーなものである。全体高等程度の教科書として編纂されたもので、その序文には Weber-Lehrbuch der Weltgeschichte; Duruy-Histoire du Moyen Age 及び Histoire des Temps Modernes; Freeman-General Sketch of European History 等の書物を据拠したことが記してある。第一部の古代史には、はじめにインド・シナ・オリエント諸国の歴史を述べ、ついでギリシア・ローマの歴史を記述する。第二部中世史は、ゲルマン民族の移動に起つて、十字軍後の情勢に及び、第三部近世史は、宗教改革の運動にはじまつて、フランス革命の変動を経て、イタリアの統一・プロシア・フランス戦役後の情勢に

及ぶ。事件の叙述は平明詳細で、三十余の歴史地図が挿入されていて、学生の参考にはすこぶる便利である。英文のこの種の書物としては優れていたために、日本でもかなり広く用いられたらしく、その翻刻本もある。津田左右吉博士は、フィッシャーの書によって、西洋史の大略を学んだそうである。恐らく東京専門学校では、この書を教科書として使用したのであろう。同じような例は、他にも多かったと思われる。

六 バックル及びギゾーの文明史

バーレー及びスウィントンの万国史は、いふなれば初学者の読物若しくは入門書であって、史書として取り上げる価値は全くない。フィッシャーにしても、やや高等な教科書である。しかしほぼ同時に輸入されたバックル及びギゾーの著書は、史学史上重要な著作であって、それが日本の学者あるいは思想家に及ぼした影響も、また没することができない。いま専門的に深く立ち入ることを避けて、簡単にここに付説したい。

バックル (Henry Thomas Buckle, 1821—1862) は、ロンドンの富裕な商人の子として生れた。少年の頃から健康に恵まれなかったために、正規の学業を修めず、却ってチェスの名手として知られた。一八四〇年から一八四四年まで大陸に滞在し、それ以後歴史の著述に志した。一八五七年に有名な「英国文明史」(History of Civilization in England) の第一巻が公刊され、洛陽の紙価を高からしめた。第二巻は一八六一年に世に出た。この年バックルはエジプトに赴き、シナイ半島を経て、翌年イエルサレムに達した。しかも不幸にしてナザレで熱病に冒され、ダマスクスで歿した。彼の文明史は、文明の自然的条件、即ち風土や食物などを論ずると共に、心性の自由

の問題、統計や心理学的方法の問題、貨財の増殖と分布、道德と知識との進歩などの問題を提起し、全体として人間の知識を確信すると共に、自然科学の法則に類似した歴史法則を求めようとしたもので、それは巨大な未完の序説であると称せられている。あるいはこれを、百年後のアーノルド・トインビーの先駆であるともいえるか。ステューヴン (Sir Leslie Stephen, 1832—1904) は、バックルの為したことは、史学に、新しい結果を寄与するという性質のものではなく、歴史の問題に対して、科学的方法を適用することの可能性に対する信仰を、一般に広めることにあったと言っている。適評というべきである。

ギゾー (François Pierre Guillaume Guizot, 1787—1874) の生涯は、バックルとは、すこぶる趣を異にしている。彼は南フランスのニームに生れたが、父が革命の時に刑死したために、母と共にジュネーヴに移り、ここで歴史と哲学とを学んだ。業を終えてパリに帰り、文筆を以て名声を馳せたが、その間にパウリーヌ・ド・ムーラン (Pauline de Meuran) の「パブリシスト (publiciste)」誌への寄稿を、代作したことから終に彼女と結婚するに至ったことは、有名なエピソードである。

ギゾーの才能は早くから発揮され、一八一二年にはわずかに二十五歳で、ソルボンヌ大学の近世史講座を担任した。しかし一八一四年ナポレオンの没落とブルボン王朝の復辟と共に、彼は政治的生涯に入り、あるいは官につき、あるいは野に下ったが、つねに立憲王政の中庸の立場を取り、一八三〇年の七月革命によって、オルレアン王朝が成立すると、彼は内務大臣となり、また文部大臣となった。フランスの初等教育の制度を確立したのは、この時である。一八四〇年彼は駐英大使となったが、間もなくスール内閣が成立するとその外相となり、スールが引退する

に及んで首相となった。これはフランスの立憲王政の時代で、最も永続した内閣であった。しかし一八四八年に二月革命が起って、オルレアン王朝が倒れると、ギゾーもロンドンに亡命せざるを得なかった。以来二十数年間、彼は尽きざる精力を傾けて、歴史の述作に従った。それはわが新井白石の境涯に酷似した点がある。その政治的隠退の時代こそ、彼の最も幸福な時代であつたであらう。

彼の著作はすこぶる多い。しかしその中で「ヨーロッパ文明史」(*Histoire de la Civilisation en Europe*, 1845)は、ソルボンヌ大学に於ける十四回の講演を集録したものであつて、比較的小篇ではあるが、そこにはギゾーの歴史に関する思索が要約されて最も広く行われ、また大きい影響を与えたものである。ギゾーは文明という言葉、狭い意味に用いず、広い意味に用いている。彼自身が定義しているように、文明とは集団生活の完成、社会の発展、また人間相互の關係の完成である。いわばそれはヨーロッパ社会の発達史である。そしてバックルと、その立場にやや異なつた点はあるが、そこに人類の進歩の経過を見ようとする態度は、同一である。

歴史といへば、支配者の交替と、英雄の逸話とを羅列したもの、あるいはそこに道德的鑑戒を叙述するもの、と考へていた当時の日本の知識階級が、こうした人類の社会と文明との進歩の実証的説明に接して、驚嘆を禁じ得なかつたことは当然である。それはむしろ一種のショックに近かつたに違いない。そこでこれに関する訳書は、次々に現われた。バックルについては、

伯克爾氏

英国開化史総論

大島貞益訳

明治八年

英国文明史

八冊

土居光華・萱生奉三共訳

明治一二年

などがある。またギゾーについては

泰西開化史 一冊 荒木卓爾・白井政夫訳 明治七年

歐羅巴文明史 一四冊 永峯秀樹訳 明治七年—十年

西洋開化史 二冊 室田充美訳 明治八年

などがある。当時フランス語は、まだ普及していなかったもので、ギゾーの書は、主としてその英訳である C. S. Henry-General History of Civilization in Europe. 1842 によって読まれたらしい。永峯秀樹の訳は、即ちヘンリーの英訳からの重訳である。しかし室田充美の訳は、フランス原本からの訳である。

永峯秀樹（嘉永元年—昭和二年）は、甲斐の出身で、後に幕臣の列に入り、維新後沼津の兵学校に学んだが、バレーの万国史を読んで世界の大勢を知るに及んで、従来の世界観が根柢から覆えされ、日本が西洋諸国の勢力に抵抗して、その独立を守るためには、海軍が必要であることを自覚したという。その事情から、永峯は後に新設された海軍兵学校の教官となって、明治三十五年に及んだが、その傍ら多くの翻訳を公けにした。その範囲は経済・数学・物理・農学に及んでいる。その中でも、タウンSEND版から訳した「開巻驚奇暴夜物語」あちぎやものがたり（二冊）は、アラン・ビヤンナイトの日本訳の嚆矢というべきものである。

福沢諭吉は、バックル及びギゾーから、強い影響を受けた。小沢栄一氏の「日本近代史学史の研究」第二章啓蒙史学の成立によると、福沢がギゾーの英訳本を入手したのは、明治五・六年頃、はじめてバックルに接したのは、明治六・七年頃であるという。福沢の「文明論の概略」（六冊）は、明治八年に公けにされたものであって、日本

が国家として独立するためには、人民の自覚による文明の進歩がなければならないという主旨を論述したものであるが、そこにはバックル及びギゾーの影響が多く見出される。例えばその第二章「一国人民の智徳を論ずの中では、『英人ボックル氏の英国文明史』に曰くとして『一国の人心を一体として之を見れば、その働に定則あること実に驚くに堪たり』と、統計を利用して、社会の状態を判断することを論じ、第八章西洋文明の由来では、『仏蘭西の学士ギゾー』と名を挙げて、ヨーロッパ史の概要を記述している。小沢氏の研究によれば、なお第二章・第三章・第八章は、ギゾーにより、第四章・第六章・第七章・第九章には、バックルが有力な示唆を与えているという。勿論福沢には彼自身の見識があったから、バックル、ギゾーを引用しても、これを無条件に採用したわけではないが、これらの書物が福沢の思想を構成する上に、大きい影響を及ぼしたことは、否むことができない。

明治十年代には、文明史若しくは開化史の名を冠する書物が、少なからず公けにされた。いまそれらについて記述する必要はない。しかしその中で、室田充美の「大日本文明史」(明治十五年)などは、著者はギゾーの訳者であって、その史論がギゾーの影響を受けたことは、明らかである。また「日本史学提要」(明治十六年)は、三宅米吉の青年時代の著作であるが、三宅は慶応義塾に学んだから、やはりギゾーやバックルから学ぶところがあつた。(勿論早くスペンサー(H. Spencer)やコンテ(A. Comte)から示唆されたことも、否定できない)。田口卯吉の「日本開化小史」は、明治十年にその巻一を公けにし、明治十六年にその巻六を終えている。田口は経済雑誌社を創立して、経済学者として知られ、また鋭敏犀利なジャーナリストであつたが、同時に「史海」の編集者として、史学にも多大の興味を持っていた。「日本開化小史」は、政治的推移を中心としているが、宗教・学問から風俗・

習慣の変遷をも論述し、明治の史学に新しい様式を与えたものである。そしてその史観には、三宅と同じくスベンサーや、ジョン・ラボック (John Lubbock-Lord Avebury) から得たところも多いが、その最初に文明の進歩を説き、社会に一定不変の理法のあることを論じ、特に貨財の蓄積及び分配について考えたのは、明らかにバックルの所論を受けたものである。なお福田徳三博士は、ギゾーの啓蒙的政治史論が、田口の文明史に決定的に影響したと論ぜられたが、いまその証拠を明白に挙げることはできない。

明治十九年にランケの門弟リースが東京大学に外国人教師として着任し、厳密精緻なドイツのアカデミックな史学を伝えるに及んで、その学風は世間を風靡して、バックルやギゾーは漸く主流から退けられた。しかし彼等の著書が、旧い日本人の歴史に対する意識を破壊し一新した啓蒙的意義からいえば、その功績は没することができない。そして彼等が人間の社会と文明の進歩に、ある法則を求めようとする態度は、またマルキシズムの発展段階説の先蹤を為すものといわなければなるまい。

七 ウェブスターの辞書

多くの啓蒙書と共に、ここに逸することのできないのは、ウェブスターの辞書である。福沢がその最初の洋行に当って、ウェブスターの辞書を購入し帰ったことは、すでに述べた。ただ前島密の談話によると、開港前後に前島は長崎から薩摩藩に招かれて、お抱え教師として洋学を教授することになった。薩摩藩では大いに彼を尊敬して、藩侯（忠義？）の特別の思召しを以て、その秘蔵の宝物を拝見させることとなった。前島は正装してこの恩命を受

けた。その宝物は大きい桐の箱に蔵められ、その中には蒔絵の函があり、更にその中に紫の袱紗で包んであった。前島は一拝して包を解くと、その秘宝はウェブストルの大辞書であったという。この奇談を事実とすれば、ウェブスターの辞典は、恐らく福沢が携え帰る以前に、日本に渡来していたといわなければならない。これが第一版であったか第二版であったかは、判断に苦しむが、あるいは第二版であって、斉彬の時代に、オランダ人を通じて入手したものであろうか。この書物は今もなお島津家に保存されているかどうか。いずれにしても一異聞といわなければならない。

この辞書の編纂者ウェブスター (Noah Webster, 1758—1843) は、コネチカット州のウェスト・ハートフォードの名門の出身であって、エール大学を終えて弁護士となった。一七九三年、彼はニューヨークでミネルヴァという新聞紙（後にコンマーシャル・アドヴァタイザーと改称した）を刊行して、ジャーナリストとして活動し、また多くの公職に就いた。しかし彼はそれと同時に早くから語学教育に興味を有し、一七八三年から八五年にかけて、「英語文法原論」(Institute of the English Language) を著わしている。これは綴字書 (Spellingbook)、『文法及び読本の三部に分れ、アメリカで公けにされたこの種の書物の最初のものともいうべきであって、そのために広く各地の学校で採用され、彼の生活は二十年間その収入によって支えられたという。そしてこの書物は現在もなお需要多く、一九四七年までにその発行部数の総数は七千万部以上に達している。

しかしウェブスターの名を、永く伝えるものはその辞書である。彼は一八〇六年に「簡明英語辞書」(A Compendious Dictionary of the English Language) を著した。これは多分に事典の性質を有したものである。翌

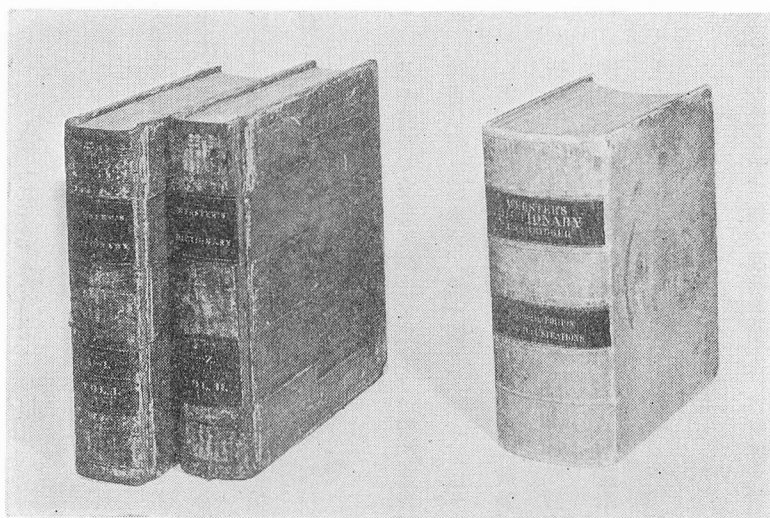
一八〇七年から、彼はその大辞典の編纂に志し、フランス及びイギリスで資料を蒐集し、ケンブリッジ大学で、その草稿を完成した。これが *An American Dictionary of the English Language*. 1828 二巻本である。収載語数一万二千に及ぶ。そしてその三万乃至四万に及ぶ説明は、それ以前の辞書に、全く見られなかったものである。一八四〇年には、第一版を訂正増補した第二版が刊行された。しかもウェブスターは、なおその修正に務め、その付録が完成したのは、逝去前数日のことであったという。

ウェブスターはその逝去の年に、メリアム (Merriam) 社にその著作権を譲り渡した。以来同社では、各種の版を公けにしている。その大辞典は、一八九四年から、*International Dictionary* の名で発行され、一九〇九年以来 *New International Dictionary* と名を改ため、一九六一年には、その三訂版が出版されている。

また *Webster's New Collegiate Dictionary*; *Webster's New Dictionary of Synonyms*; *Webster's Biographical Dictionary*; *Webster's Geographical Dictionary*; *Webster's New Practical School Dictionary*; *Webster's Elementary Dictionary*; *Webster's New Ideal Dictionary* など、それぞれ各種の用途に応じて編輯されたものが発行されて、利用者に便宜を与えている。

ウェブスターの辞典は、その性格及び価値からすれば、*Oxford New English Dictionary* などに、比較すべきものではない。しかし簡潔で要領を得た説明、百科全書的な記述は、一般の人々には最も喜んで迎えられた。日本では福沢諭吉以来殊に親しまれ利用された。

明治二十年に発行された島田豊編「附音挿図和訳英字彙」、明治二十一年に発行されたイーストレイキ (F. W.



ウェブスター辞書（左 1828 年版：右 1860 年版）

Eastlake)・棚橋一郎共訳「ウェブスター氏新刊大辞書和訳字彙」は、共にウェブスターの大辞典を底本として作られ、広く行われたものである。

ウェブスターの辞典を日本に輸入したのは、勿論丸善ばかりではない。しかしその輸入のシェアの多くを丸善が占めていたことは疑がうことができない。現在でも Third New International Dictionary の年間輸入は七百部（昭和四十三年調べ）に上っている。この辞書が三段組で本文が二六六二頁の大冊であることを思うと、この数は相当大きいということができよう。丸善が昭和四十三年（一九六八年）に洋書百年展を開催した際に、メリアム社が一八二八年版と一八六〇年版のウェブスター大辞典、及びスペリング・ブックを空輸して展覧に供し、その好意を示したのは、この点からいってまことに故あることであつたといわなければならない。

八 「東京新繁昌記」の記事

ここに当時輸入の洋書及び洋書店に関する興味ある記事がある。服部撫松（誠一）は、晩年は地方の中学の教師などをして、あまり振わなかったが、明治の初年には、各種の方面に才筆を謳われたジャーナリストである。彼が明治七年に公けにした「東京新繁昌記」は、寺門静軒の「江戸繁昌記」中島棕隠の「都繁昌記」の体を承けて、軽妙な漢文によって維新後の東京の世態人情を描写し、これに揶揄諷刺を加えたものである。その第三篇に「洋書肆」という一項がある。その中にいう

「文華ノ明ラカナル、今ニ於イテ盛ナリト為シ、書林ノ富ミ、古ヘ未ダ聞カザル所ナリ。英書日ニ舶シ、仏籍月ニ渡リ、支那・独逸又相次グ。蟹行之書、蚯蚓之字、煥乎トシテ皆ソレ文章アリ。著作翻譯随ツテ刊行シ、神書仏經ヲ連ネテ、紛々蘊々、積ンデ以テ人材ヲ培養スル一大藪ヲ為ス」（中略）

「書架四壁、一縦一横、コレヲ掩フニ玻璃戸ヲ以テス。朱皮（赤表紙）屏立シ、烏装（黒表紙）櫛比ス。表題皆金字ヲ鏤バメ、晃々トシテ眼ヲ射ル。正面ニハ維波斯德刺氏ノ大字書ヲ安置シ、左ハ則チ修身論、右ハ則チ国史地理書、究理篇、位置整斎ナリ。読本（原語利的爾）ノ如キハ、一二三ヲ連ネ、コレヲ蔵ス。ソノ四五以上ニ至ツテハ、本肆ノ未ダ仕入レザル所、蓋シコレヲ読ム者少キヲ以テナリ。伴頭少シク横文ヲ知り、小猴能ク表題ヲ語ンズ。一自負生肆前ニ坐シテ曰ク、近舶何ノ新本有ルヤ。伴（頭）曰ク、有リ有リ、直チニ数冊ヲ抽キ出シテ、他ノ面前ニ積ム。客冊毎ニ数葉ヲ翻シテ曰ク、此レハ密爾氏ノ經濟論、僕既ニコレヲ語ンズ。巴



服部撫松著「東京新繁昌記」

哥氏ノ文明史モ亦既ニコレヲ呑ム。区々タル雜書ノ如キハ
 尽ク臍下ニ蓄藏ス。又何ヲカ新本ト為ス」(中略)

「一老生悄々トシテ来テ肆隅ニ佇立シ、低声ニ問ウテ曰ク、
 文典有ルカ。小猴曰ク、比尼阿氏ノ文典歟、加堅波士氏歟。
 並ニ有リ。孰可ナラン。老生惑フ色有リテ曰ク、彼此相煩
 ハスニ及バズ、国字傍註ニシテ便チ可ナリ。伴曰ク彼書未
 ダ我国字ヲ附スルモノ有ラズ、或ハ翻譯書ノ謂歟。曰ク横
 文ヲ以テ訳スル歟、或ハ漢字ヲ以テスル歟。曰ク官カ言転
 倒ス。横文ヲ訳スルニ即チ国語ヲ用ヒ、初学ヲシテソノ意
 ヲ解サシムルノミ。官若シ横文ヲ学ババ何ゾ又国字ヲ用ヒ
 ン。曰ク子カ弁ヲ煩ハスニ及バズ。洋書独稽古ニシテマタ
 足レリ。伴一喝シテ曰ク、本肆専ラ洋書ヲ売り、小学読本
 ノ如キモノヲ鬻ガズ。官請フコレヲ裏坊ノ小書肆ニ問ヘ。
 客マタ悄々トシテ出デテ去ル」(下略)

この文中に挙げられた若干の洋書の中で、維波斯德刺すなわ
 ちウエプスター、巴哥すなわちバックル、加堅波士すなわちカ

ツケンボスについては、すべて前に述べたところである。密爾ミルはいうまでもなく有名なジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806—1873) であつて、その経済論は恐らく Principles of Political Economy, 1848 であろう。この書については、あまりに有名であるからここには述べない。

ここに記述された洋書肆が、丸善をモデルにしたものかどうかは確かにわからない。ある点では想像も、また誇張もあることであろう。しかしこの文中には、当時の洋書店の店頭の空気が、かなりの迫真性を以て描かれている。その点で、この文章はただ諧謔諷刺に止まらず、また貴重な文化的資料であるということができよう。

九 三菱商業学校の購入図書

明治十一年に、三菱商業学校が設立された。主としてこれに当つたのは、豊川良平であつた。その際の図書購入に関する三月十二日付の丸屋の納入見積書が保存されている。それには二十九種の書籍が記載されている。当時丸屋の取り扱っていた書籍の一斑を知るに足る資料である。しかしそれには、日本外史、十八史略、康熙字典、玉篇、文章軌範、八大家文、銀行大意、法例彙纂といったような種類のものが、大部分を占めている。商業学校には、予科にも本科にも、和漢籍科があつたのであるから、当然のことではあるが、洋書輸入の特色が見られないのは遺憾である。ただほぼ同時に別に丸屋から差し出した見積書には、マクロック商法字典、マクレオド銀行論、リビー商律、ハンソン海上保険書、アンドリュール・ラテン・ディクシヨナリーの五種があつて、それぞれ商業学校によって購入されている。また更に四月には、ゼボンのモニー・メカニズム七部を教科書として納入している。マクロック

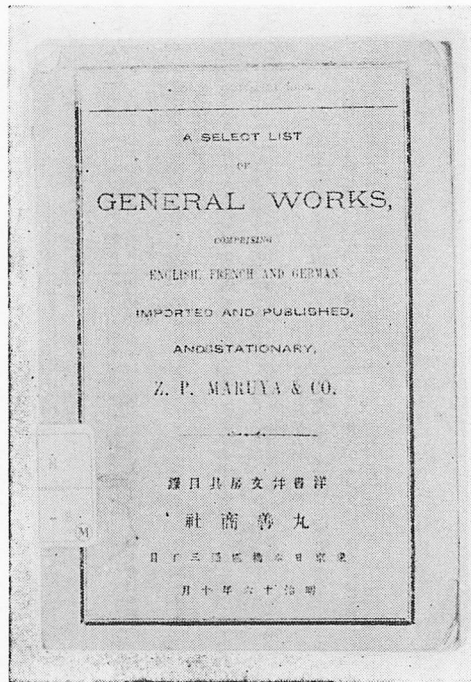
の商法字典は、J. R. McCulloch-A Dictionary, Practical Theoretical and Historical of Commerce and Commercial Navigation. London, 1832 である。マッカーロック（一七八九—一八六四）はスコットランドの経済学者で、後に帝室用度庁の監査官となった人物である。マクレオドの銀行論は H. D. Macleod-The Theory and Practice of Banking, 2 vols., London, 1855—56 か、同人の Elements of Banking. London, 1876 か不明である。前者は広く行われて、一八八三—一八六六年に第四版を刊行しているが、もし、この書物とすれば、一八七五年の第三版であろう。しかし恐らくは簡明な後者ではあるまいか。マクレオド (Henry Dunning Macleod, 1821—1902) はスコットランドの経済学者で、スコットランドにおける救貧法の制定にも参与している。はじめた「ベンシヤムの法則」といふ言葉が用いられているのは、彼の「経済学入門」(Elements of Political Economy) である。リビー商律は、L. Levi-International Commercial Law であろうか。リヴィ (1821—1888) はイタリヤ生れのユダヤ系の法律家であって、はじめリヴァプールで商業を営なみ、後にイギリスに帰化した。前著のほかに History of British Commerce and of the Economic Progress of the British Nation; Commercial Law; Manual of the Mercantile Law of Great Britain and Ireland などの著書がある。

ハンソンの海上保険書は、不明である。アンドリュ・ラテン・ディクショナリーは、E. A. Andrews-Latin-English Lexicon. New Edition, London, 1862 である。ゼボンは W. S. Jevons (1835—1882) であろう。彼は若くしてオーストラリアに赴いたが一八六六年以来、マンチェスターで、経済学・哲学を講じ、後ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジで、また経済学を講じた。著書は数多いが、ここに挙げられたものは、Money and

年には明治義塾となり、後に中央大学に吸収された。これらの書物はいままも保存されているかどうか。その現状を知ることができないのは遺憾である。

一〇 明治十六年の丸善洋書販売目録

丸善が図書販売目録を発行したのは、早く明治十二年の頃に遡る。その和書に関するものは、いままもその実物が保存されている。洋書に関するものは、やや遅れて翌明治十三年頃に発行されたい。これを編輯したのは早矢



明治十六年洋書并文房具目録

the Mechanism of Exchange. London, 1872 である。

これらの書籍は、いずれにしても初期の実業教育の貴重な資料である。特に早くラテン語の辞書を備えつけているのは、珍らしいことである。馬場辰猪は明治十一年、イギリスから帰朝して、三菱商業学校で商法などを講じた。ラテン辞書などは恐らく彼がローマ法を講ずる用に供するためであったのではないかと推測される。三菱商業学校は、明治十五

仕民治である。しかし残念ながら、その実物は現存しない。

現在見ることできる最も早い洋書販売目録は、実に明治十六年十月の発行にかかるものである。これはすでに一部の冊子であって、縦一五・七センチ、横一一・二センチ、最初のインデックスを別にして、五三ページある。表題には A SELECT LIST OF GENERAL WORKS, COMPRISING ENGLISH, FRENCH AND GERMAN. IMPORTED AND PUBLISHED AND STATIONARY, Z. P. MARUYA & CO. とある。その内容はアルファベット順に八十九種に類別してある。やや煩雑であるが、貴重な資料であるから、その類別と、その分類に収められている書籍の数を、左に掲げることとする。

Agriculture	25
Algebra (Mathematics)	
Anatomy (Medical Books)	
Architecture, Carpenter and Building	45
Arithmetics (Mathematics)	
Astronomy and Meteorology	12
Atlas (Maps, Atlas and Charts)	
Banking (Commerce)	
Bible (Theology and Religion)	
Biographical Works	13
Bookkeeping	11

Botany (Natural History)	
Building	
Calculus (Mathematics)	
Charts	
Chemistry	32
Commerce and Banking	23
Composition and Rhetorics	15
Constitution (Political Science)	
Conversation (Language)	
Dictionaries	
Drama (Poetry &)	41
Drawing	13
Educational Works	15
Elocution and Oratory	13
Encyclopedia (Dictionaries)	
Engineering	31
Entomology (Natural History)	
Fine Arts	12
French Books	41
Geography	16
Geology and Mineralogy	20
Geometry (Mathematics)	
German Books	113

Grammar (Language)	
Guide Books (Travels, Voyages, &)	
Gymnastics	5
History (General)	43
Hygiene (Physiology &)	
Industrial Arts (Manufactures &)	
Intellectual (Philosophy)	
Languages	17
Law Books (in General)	55
Letter Writing (Composition)	
Lexicons (Dictionaries)	
Literature	34
Logic (Philosophy)	
Machinery (Engineering)	
Manufactures and Industrial Arts	19
Maps, Atlas and Charts	13
Mathematics	54
Mechanics (Natural Philosophy)	
Medical Books	59
Mensuration (Surveying) or (Mathematics)	
Mental Philosophy (Philosophy)	
Metallurgy and Mining	11
Metaphysics (Philosophy)	

Meteorology (Astronomy &)	
Military and Naval Science	
Mineralogy (Geology &)	22
Mining (Metallurgy &)	
Miscellaneous and General Works	
Moral Philosophy (Philosophy)	16
Natural History	
Natural Philosophy	67
Naval Science (Military &)	
Navigation (Naval Science)	46
Object Teaching (Educational Works)	
Painting (Fine Arts)	
Penmanship	
Philosophy	79
Photography (Fine Arts)	
Physics (Natural Philosophy)	13
Physiology and Hygiene	13
Poetry and Drama	
Political Economy (Political Science)	
Political and Social Science	94
Primers	
Psychology (Philosophy)	
Readers	35

Religion (Theology & Rhetoric (Composition & Social Science (Political & Spellers	
Steam Engine (Engineering)	
Surveying	15
Theology and Religion	
Travels, Voyages and Guide Books	10
Veterinary Medicine	5

その分類は、いずれ当時ヨーロッパあるいはアメリカから舶載された目録に準拠したものであろうが、半数以上の項目に、一冊も載っていないのは、小項目が大項目に含まれているからである。

種類別によって書籍の数を見るに、Political and Social Science (政治社会科学) が九四項で群を抜き、Natural History (博物学) が六七、Medical Books (医学) が五九、Law Books (法律学) が五五、Mathematics (数学) が五四、Natural Philosophy (物理化学) が四六、Architecture, Carpenter and Building (建築) が四五種に上っているのは、当時の社会的需要からして当然のことであるが、Philosophy (哲学) が七九種の多数に上っていることは、注意に値する。勿論この中には、倫理学、論理学、心理学、教育学など、純粹の哲学のほかにこれに関連した学問のすべてを含んでいることは、いうまでもない。

いまこの目録に掲載されている各種の書籍について、それぞれ解説を施すことは、当時の文化史の重要な側面

を記述することであるが、それは編者の能力を以ては、到底不可能のことである。ただ何といつても、欧米の文明が公然輸入されるようになってから、二十年に満たない時代であるから、その大部分が、初歩の入門書、教科書、若しくは通俗的啓蒙書によって占められていることは、已むを得ない。

しかしそれにも拘わらず、その中に標準的なもの、またすこぶる高級なものが含まれていることは、注意されなければならぬ。試みに Literature の項を見ると、Literature Primer は、ただ文学ばかりでなく、歴史、地理、言語学などをも含んだ入門の叢書であるが、その中に、Brook-English Literature: Dowden-Shakespeare の二書がある。いまから見れば勿論古いものであるが、英文学研究の上から、逸することのできないものである。殊にダウデンの著は一八七七年の出版に係るものであるが、現在でも参考するに足るものである。またドイツのシュレーゲル兄弟 (F. and A. W. Schlegel) の評論を英訳した Lectures on the History of Literature (Ancient and Modern); Lectures on Dramatic Art and Literature は、^{『』} Bohn's Standard Library の中に収められているものであるが、今日でもなお尊重されている。

また English Men of Letters が、この時期にすでに輸入されていることには、驚きを禁じ得ない。この叢書の中に収められた Johnson, Shelley, Hawthorne などは、今日でもなお研究者にとって、必読の書物となっている。クレイク (G. L. Craik, 1798—1866) の英文学提要 (A Manual of English Literature) は、一八八三年に刊行されたものであるが、その年に直ちに輸入されている。これなどは、いかに最新の知識が伝達されたかを知るに足るものであろう。

なお小説の類には、リットン (E. G. Lytton, 1803—1873) やスコット (Sir W. Scott, 1771—1832) の諸作が載っている。Scott の作品は、ただ *Waverley* として挙げられているが、四十八巻といえ、一八五九—一八六一年のエディンバラ版の全集であろう。いずれも当時の翻譯文学のもととなったものであって、明治初期の文学史上に、重要な意義を有するものである。(以上は主として平井正穂教授の示教による)

また哲学の部門についていえば、*Bentham-Theory of Legislation*; *Comte-Philosophy of Science*; *Fichte-The Science of Rights*; *Hume-A Treatise on Human Nature*; *Kant-Critique of Pure Reason*; *Mill-Utitarianism* のような古典的名著が、その名を列していることは、たとえ、カントやフーヒテの著書が原著でなくて、英訳であるにしても、この頃すでに日本の学界が、ヨーロッパの學術の大道を歩みはじめていることを示すものである。

この哲学に関する書籍の中で、最も優位を占めているのが、スペンサーの諸著作であることは、すこぶる興味がある。いうまでもなくスペンサー (H. S. Spencer, 1820—1903) は、進化論を社会の発展に適用した哲学者であって、その広汎な学識はある意味で、十九世紀後半のイギリスを代表する思想家であった。その多くの著書の中で、この目録には、

Study of Sociology; *First Principles*; *Principles of Sociology*; *Principles of Biology*; *Principles of Psychology*; *Date of Ethics*. (*Principles of Morality*. Vol. 1. Part 1.) *Essays Moral, Political, and Aesthetic*; *Education, Intellectual, Moral, and Physical*; *Social Statics*; *Illustrations of Universal*

Progress ; Recent Discussions in Science ; Philosophy and Morals ; Descriptive Sociology. No. I—VII

など、十数種類が記載されている。その一々についてここに解説する余裕はないが、まず目ぼしいものの一通りは揃っているといつてよい。スペンサー哲学が当時の日本に持て囃された状況をほぼ推察することができよう。